

目的 ゆかたを常に寝衣として着用する場合、くり返しの洗濯によつて、ゆかた地と同様、縫い目も損傷し、使用が不可能な状態となる。ゆかたの縫製は、手縫いの他にミシン縫を専入したものが多く使用されているが、くり返しの洗濯・アイロンかけに耐える最適な縫製方法を検討する目的で、実験を行なった。

方法 試料布として綿100%のゆかた地2種を用い、綿糸(No30・No50)、ポリエステル糸で、手縫またはミシン縫を行なった。次に0.2%の弱アルカリ性洗剤にて、洗濯機により洗淨し、自然乾燥させた。1回の洗淨時間は10分間、12回のくり返しである。縫い目の強度は、定速緊張型引張試験機を用い、グラフ法により測定した。縫い目の損傷状態は、写真撮影により観察した。

結果 縫い目強度は、2種の試料共、No30での手縫が他の縫い糸でミシン縫したもののより有意に低かった。試料1については殆どの回において、ポリエステル > No50 > No30の順になり縫い糸間に有意差が認められた。試料2では、ポリエステル > No50 > No30の傾向にあったが、一部でポリエステルとNo50との間に有意差が認められず、アイロンかけ後は、No50 >ポリエステルの順になった。原布とアイロンかけ後の縫い目間の強度は、試料1でNo30が有意に低くなり、他の縫い糸では有意差は認められなかった。試料2の場合は、3種の縫い糸共に有意差が認められた。写真撮影により損傷状態を観察すると、ポリエステル糸に布切断が多く見られた。伸び率に関しては、すべてにおいて原布が最も低く、1回目の洗淨後で、有意に高くなった。